

## 古事記に学ぶ その 27

## 履中天皇から弟たちへの継承とその後

## &lt;1&gt; 反正(はんしょう)天皇

17代履中天皇の後を受け継いだのは、弟の蜷之水齒別命(たぢひのみづはわけのみこと)。

第18代反正(はんしょう)天皇を名乗り、多治比(たじひ)に柴垣の宮を造って天下を治めた。

近鉄南大阪線の河内松原駅の南方にある柴籬(しばがき)神社に、柴垣の宮があったことを示すものが残されている。この神社は24代仁賢天皇の勅命で建てられ、主祭神三柱のひとつが蜷之水齒別命(反正天皇)になっている。 柴籬(しばがき)神社 <https://yahoo.jp/vGqjnG>

反正天皇は身の丈九尺二寸半(約 2.8m)、齒の長さ一寸(約 3cm)、幅二分(約 6mm)、上下がきれいに並び、珠を緒に貫いたようだったと記されており、「齒の神様」としても崇められているとのこと。

反正天皇は、丸邇(わに)の●評基登(こごと)の娘●都怒郎女(つぬのいらつめ)を妻として、●甲斐郎女(かひのいらつめ)・●都夫良郎女(つぶらのいらつめ)の二柱を生んだ。

また同じ臣(評基登)の娘●弟比売(おとひめ)を妻として、●財王(たからのみこ)・●多訶弁郎女(たかべのいらつめ)の二柱を生んだ。

この天皇は60歳で他界し、陵は毛受野(もずの)に造られた。現在の地図で確認すると、仁徳天皇陵(父の墓)の北側にあり、仁徳天皇陵・履中天皇(兄)陵と共に同じ向きで造られている。

反正天皇陵 <https://yahoo.jp/whwvG5>

## &lt;2&gt; 允恭(いんぎょう)天皇

反正(はんしょう)天皇の弟である男浅津間若子宿禰命(をあさづまのわくごのすくねのみこと)が遠飛鳥に宮殿を建て、19代の允恭天皇となった。仁徳天皇の御子が三代続いて(兄から弟へ)天皇の座に着いた。

允恭天皇は、意富本杼王(おおほどのみこ)の妹●忍坂之大中津比売命(おさかのおおなかつひめのみこと)を妻として、●木梨輕王(きなしのかるのみこ)・●長田大郎女(ながたのおおいらつめ)・●境之黒日子王(さかいのくろひこのみこ)・●穴穗命(あなほのみこと)・●輕大郎女(かるのおおいらつめ)・●八瓜白日子王(やつりのしろひこのみこ)・●大長谷命(おおはつせのみこと)・●橘大郎女(たちばなのおおいらつめ)・●酒見郎女(さかみのいらつめ)の九柱を生んだ。

輕大郎女は体が白く輝いて、着衣の外まで輝いていたことから、別名を●衣通郎女(ころもとおしのいらつめ)と言った。

穴穗命(あなほのみこと)が次の20代天皇になり、天下を治め、大長谷命(おおはつせのみこと)ものに天下を治めた。

大長谷命(おおはつせのみこと)は、位に就くべき時になっても「私には持病があり、治る見込みはないので…」と固辞して受けなかったが、大后ほか側近の説得によってようやく即位が決まった。

ちょうどその頃、新羅の国王が81艘の船に載せた貢物を献上した。貢物を取り仕切った大使の名は●金波鎮漢紀武(こんはちんはんきん)。この人は医薬の処方に造詣が深く、天皇の持病を平癒させることができた。

允恭天皇は、氏や名を名乗る者たちが、世襲の際に間違えて（偽って）使うようになったことを心配して、偽りを行った者に禍を課す「言八十禍津日神（ことやそまがつひのかみ）」を祭った。味白禰（あまかし）の神社の社頭に熱湯を沸かした玖訶瓮（くかべ）を据えて、探湯（くかだち）を行った。

釜の熱湯に手を入れさせて正邪を明らかにし、部族の長たちの氏（うじ）や姓（かばね）を定めた。また、木梨輕王（きなしのかるのみこ）の名にちなんで輕部を定め、また大后の名の忍坂之大中津比売命（おさかのおおなかつひめのみこと）にちなんで刑部（おさかべ）を定めた。

この天皇は78歳で他界した。陵は、河内の恵賀（えが）の川岸を望むところにある。

地図で確認してみたら、近鉄南大阪線土師ノ里駅前（藤井寺市国府一丁目）で、大和川と石川の合流点近くにあった。また、陵の向きは仁徳天皇・履中天皇・反正天皇とは逆向き（南側が円墳で、北側が方墳）になっていた。 允恭天皇陵 <https://yahoo.jp/UAh5L>

## ＊閑話休題

履中（りちゅう）天皇（大江之伊邪本和氣命）の次弟蝮之水齒別命（たちひのみづはわけのみこと）が、謀反を起こした次々弟（墨江之中津王）を殺し、兄の待つ大和の石上の神宮に報告に向かう途中で遠飛鳥（とおつあすか）・近飛鳥（ちかつあすか）という地名が出てきた。

遠飛鳥（とおつあすか）＝現在の奈良県高市郡明日香村飛鳥

近飛鳥（ちかつあすか）＝現在の大阪府羽曳野市飛鳥（県境の二上山・穴虫峠の稜線の北西麓）

（古事記に学ぶ その26）

意富本杼王（おおほどのみこ）は、応神天皇と息長眞若中比売（おきながまわかなかつひめ）の間に生まれた若沼毛二俣王（わかぬけふたまたのみこ）が、母の妹である百師木伊呂弁（ももしきいろべ）を妻として生んだ第一子大郎子（おおいらつこ）の別名。応神天皇の章では「意富富杼王」と書かれていたが、同一人物のようである。

（古事記に学ぶ その23）

## <3> 後継を巡るもう一つの事件

<2>項の文末で、「穴穂命（あなほのみこと）が允恭天皇の後を継いで、天下を治めた」とあるが、実は少々厄介なことが起きていた。

允恭天皇が他界した後、日嗣の御子として木梨輕王（きなしのかるのみこ）が次の天皇になることが決まっていたのだが、物忌みの期間中に、実妹の輕大郎女（かるのおおいらつめ）と関係を持ってしまい、それが周囲に知れ渡ってしまった。宮中の役人を始めとして側近たちの注目は離れてしまい、穴穂命（あなほのみこと）の方に移った。

木梨輕王は、武装して大臣（おとど）の●大前小前宿禰（おおまえをまえのすくね）の家に逃げ込んだ。穴穂命の方も武装して立ち向かう形になったのだが、大前小前宿禰の骨折りにより、木梨輕王を捕まえて、伊余（いよ：伊予）の國の温泉へ流罪にした。

輕大郎女の思いはここに留まることはなく、後を追って伊余に旅立ち、のちに二人は心中した。

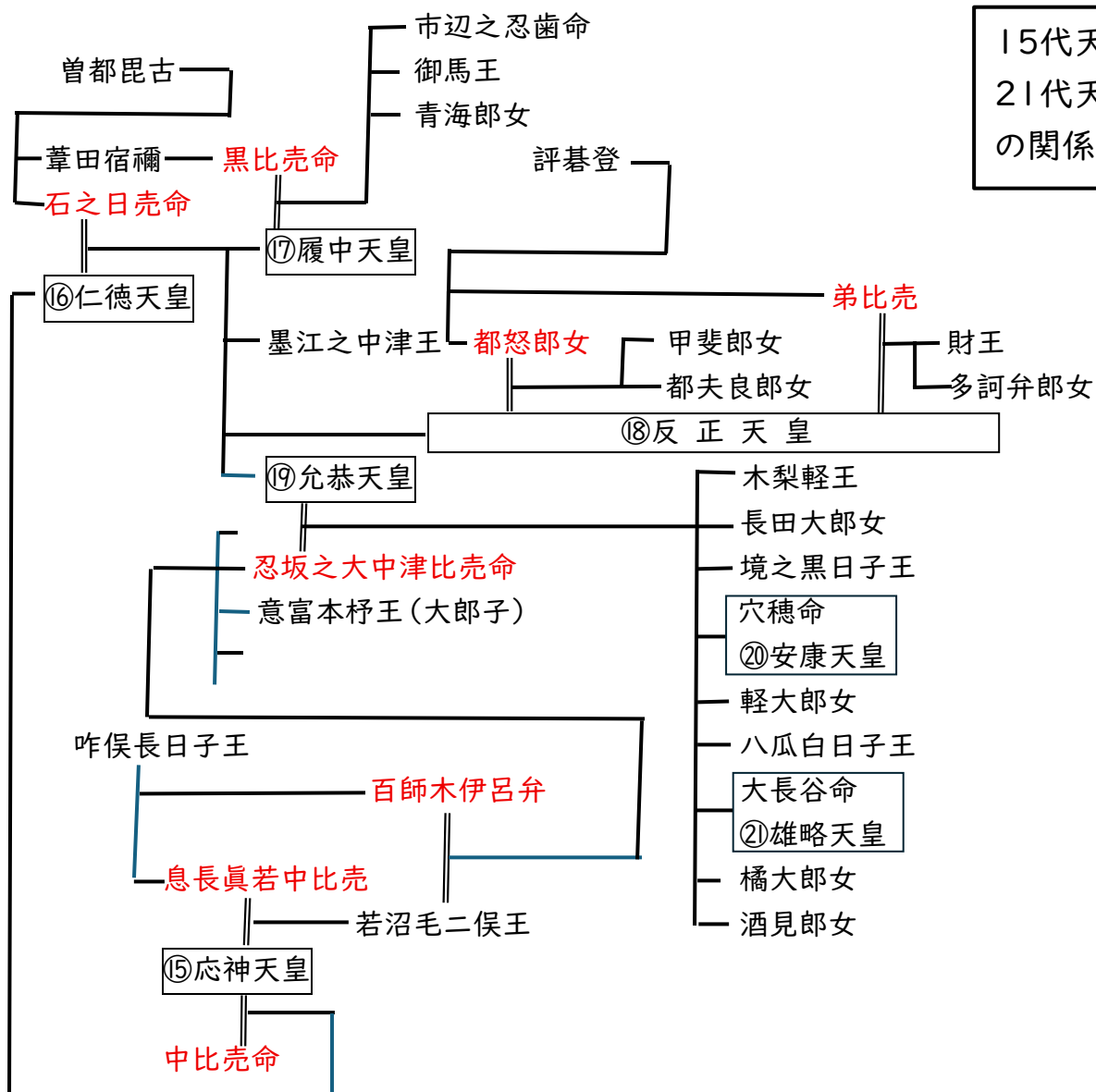
允恭天皇の後継が穴穂命（安康天皇）になるまでに、こんな事件が起きていた。

## <4> 系図のまとめ

16代仁徳天皇のあとは、三人の息子（履中・反正・允恭）が順に國を治めた。この三人の天皇と、その祖先である15代（応神天皇）を含めた天皇の関係を系図としてまとめてみた。（次葉参照）

天皇の系譜と関係しない御子は省略した。

以上



### 歴代天皇(初代~21代)

| 代  | 天皇の名(読み)  | 代  | 天皇の名(読み)  | 代  | 天皇の名(読み)  |
|----|-----------|----|-----------|----|-----------|
| 初代 | 神武(じんむ)   | 11 | 垂仁(すいにん)  | 21 | 雄略(ゆうりゃく) |
| 2  | 綏靖(すいぜい)  | 12 | 景行(けいこう)  |    |           |
| 3  | 安寧(あんねい)  | 13 | 成務(せいむ)   |    |           |
| 4  | 懿徳(いとく)   | 14 | 仲哀(ちゅうあい) |    |           |
| 5  | 孝昭(こうしょう) | 15 | 応神(おうじん)  |    |           |
| 6  | 孝安(こうあん)  | 16 | 仁徳(にんとく)  |    |           |
| 7  | 孝霊(こうれい)  | 17 | 履中(りちゅう)  |    |           |
| 8  | 孝元(こうげん)  | 18 | 反正(はんしょう) |    |           |
| 9  | 開化(かいか)   | 19 | 允恭(いんぎょう) |    |           |
| 10 | 崇神(すじん)   | 20 | 安康(あんこう)  |    |           |